

*Little Dorrit*における「監禁状態」からの解放とキリストによる救済のヴィジョン

吉田 一穂

1. 少年時代に形成されたディケンズのトラウマ

チャールズ・ディケンズ(**Charles Dickens, 1812-70**)は、**1857**年、*Little Dorrit* (**1857**)執筆に際し、作品に必要な雰囲気を作り出すために、マーシャルシー(**Marshalsea**)監獄を再訪している。マーシャルシー監獄は、ディケンズにとって生涯忘れることのできない場所であったからである。

ディケンズの父親(**John Dickens**)は、生来陽気な人で仕事熱心であったが、経済観念に乏しい人であった。彼はとうとう借金が払えなくなって、マーシャルシー監獄に投獄されてしまった。これは、チャールズが**12**歳のことで、彼はストランド(**Strand**)のハンガーフォード・ステアーズ(**Hungerford Stairs**)にあったウォレン(**Warren**)靴墨工場へ働きに出なければならなくなった。このことは、鋭敏で学問で身を立てようとしていた少年に、筆舌に尽くし難い苦悩と絶望感を与えたのであった。この時受けたディケンズのトラウマ(精神的外傷)は、生涯彼の心につきまとうことになった。ウォレン靴墨工場で下層労働者や少年たちに混じって、みすばらしい姿で働いた少年時代は、ディケンズにとってよりどころのない数ヶ月も続く悲惨さ、秘められた恐怖、屈辱感と孤独感以外のなにものでもなく、作家として成功した後も忘れることができなかった。アンガス・ウィルソン(**Angus Wilson**)は、「少年時代の数ヶ月間がディケンズの生涯にわたる芸術的創造にとっての刺激を提供していて、それなしには、今日に見るディケンズの小説の主要な部分はありませんでしたはずだ」、と述べている。¹ 自伝的小説である *David Copperfield* (**1850**)には、彼の少年時代が直接描きこまれている。ねずみのはい回る、じめじめした、今にも倒れそうなウォレン靴墨工場の建物の中で、靴墨を瓶に詰めたり、ラベルを貼るなど、慣れない仕事を割り当てられたディケンズ少年の屈辱感、母親の死後、厄介払いのため、マードストーン(**Murdstone**)姉弟により、わずか**10**歳で、マードストーン＝グリビー(**Murdstone and Gribby's**)商会にこきつかわれる、下働き小僧になったデイヴィッド(**David**)の心理描写に明確に見てとれる。²

ディケンズの多くの小説の主要部分は、彼の少年時代の数ヶ月間の経験から生み出され、彼の少年時代は、形を変えて作品に現れていると考えられている。後期の作品 *Little Dorrit* (**1857**)も例外ではない。ポール・デイヴィス(**Paul Davis**)が、「ディケンズの父親が**1824**年入れられたマーシャルシー監獄は、小説における監獄のイメージを具体化している」、と述べ、³ フィリップ・ホブスバウム(**Philip Hobsbaum**)が、「ドリット(**Dorrit**)氏は、いくつかの点でマーシャルシー監獄の囚人であったディケンズの父親に基づいて作られた人物であ

る」、と述べているように、⁴ *Little Dorrit* はディケンズのかつての債務者監獄に関する記憶から生み出された作品であると言える。1824年2月20日、わずか40ポンドの借金が払えないために、父親が逮捕され、マーシャルシー監獄に入れられたこと、チャールズ少年が家族と離れて靴墨工場で働き、父親が牢獄から釈放された後も母親によって家計の足しになるように働かされようとした経験は、そのまま *Little Dorrit* におけるマーシャルシー監獄に入れられたウィリアム・ドリットと娘のエイミー(Amy)との関係に読み取れる。作品において、エイミーは、父親の生活費をまかなうために針女として働くが、22歳であるにもかかわらず'little'という形容詞がつけられていることにより、読者はエイミーに悲哀を強く感じるだけでなく作品の感傷性をも感じる。

2. Little Nell と Little Dorrit

ここで、その感傷性によりしばしば、批判されてきた前期の作品 *The Old Curiosity Shop*(1841)に目を向けることで逆に *Little Dorrit* の特質を明らかにしてみたい。この作品において、ネル(Nell)は、賭博に金を使い果たした祖父とともにロンドンから逃げ出し旅を続けるが、フランク・ドノヴァン (Frank Donovan) が、「祖父がリトル・ネルの苦難であるように、父親はリトル・ドリットの苦難である」と述べているように、⁵ 前期の作品 *The Old Curiosity Shop* における祖父であるトレント(Trent)老人とリトル・ネルの関係はそのまま父親とリトル・ドリットの関係に移行した感がある。しかし、両作品には決定的違いがある。次は *The Old Curiosity Shop* におけるネルの死の描写である。

She was dead. No sleep so beautiful and calm, so free from trace of pain, so fair to look upon. She seemed a creature fresh from the hand of God, and waiting for the breath of life; not one who had lived and suffered death.⁶

彼女は死んでいた。かわいらしい、やさしい、これほどまで美しく静か、これほどまで苦しみの跡のない、これほどまで目に美しい眠りはなかった。彼女は、神さまのみ手からいまつくりだされ、生命の息吹を与えられるのを待っているようで、生命を終わり死を味わったものとは思えなかった。⁷

作品最後のネルの死は、ヴィクトリア朝時代において犠牲となった子供たちを連想させる死であるが、大人社会の犠牲者ということでネルとエイミーは一致点を見出したとしても、ディケンズによる作品最後の両者の描き方には決定的違いがあるようだ。その決定的違いは、ネルの物語が作品最後の彼女の死によって「天に召される子供のイメージ」を印象づけながら哀感を誘う結末に終わるのに対し、エイミーの物語が彼女自身のアーサー(Arthur)との幸せな結婚で終わることである。さらに、エイミーが監禁状態から自由になる

過程において、ディケンズが人間の複雑な心理を表現していることから、エイミーはネルよりも発展したヒロインと言える。本稿では、エイミーがいかに自身の「監禁状態」を心理的に克服し、登場人物を救い出すかについて述べてみたい。

3. マーシャルシー監獄の子供

Little Dorrit のマーシャルシー債務者監獄は、ある意味で登場人物の経済状態を示す象徴的存在としてとらえることができる。なぜならば、マーシャルシー監獄は負債を払うのに十分金を持っていないというディケンズの登場人物の感情、ずっと苦しい状態で危機にあり、何をしても失敗や破産に終わるということを象徴するものであるからだ。⁸

このような監獄の中でエイミーの父親は、「マーシャルシー監獄の父」と呼ばれ、その称号を誇りに思っているが、体面のため自己を偽っている。監獄への新入りは、全員彼に引き合わされる。この謁見の儀に関して彼はひどくやかましい。冗談好きの連中が新入り紹介の儀式をオーバーなくらい物々しく馬鹿丁寧にやっけてのけるが、彼自身の真面目くさった様子にはかなわない。彼自身の貧しい部屋でお目通りを許す時の態度には、一種のわざとらしい恩着せがましさがある。彼は、「ようこそマーシャルシーへおいでなさいました。」⁹、「さようわたしがここの父親です。皆さまがご親切にもそう呼んでくださいます。ここに20年以上住んでいることで、そう呼んでいただいてもかまわないならば、確かに私はその通りです。」(65)と言い、最古参の囚人であることを誇らしげに言い立てるが、実際のところは、歳月が過ぎ去るうちに、債務者監獄なら借金取りに苦しめられないですむ、監獄の広さに不自由を感じる以外は自由そのものだ、と感じている。門番は、彼のことを非のうちどころのない紳士として育ち、金に糸目をつけぬ教育を受けたと説明する。このような彼は、同宿人が出所する際には、名士に対する崇拜者の献上品として金を受け取る。出所する同宿人の献金に頼る度合が増すにつれ、彼は一層強く偽善的な「似非」紳士意識にしがみつこうようになる。もちろん、この「似非」紳士意識は、非常にもろいものであり、第2巻第19章の「空中楼阁の崩壊」で明らかとなるように、環境の変化により簡単に崩れ去ってしまうものである。

このような父親の犠牲となるのが、「マーシャルシー監獄の子供」であるエイミーである。さらにエイミーには兄と姉がいるが、自身は外の夜学校へ通い、兄と姉を昼間の学校へ通わせる。そして、家では彼女自身の教育は全く行われない。しかし、エイミーはそのことを恨みに思うことなく、「マーシャルシー監獄の父」と呼ばれるほど墮落した人が自分の子供にとっての父になれるわけではないと自覚し、一家の苦勞と屈辱をじっと心の中で耐える。ディケンズは、第1巻第5章でアーサー・クレナム(Arthur Clennam)の目に映ったエイミーを次のように描写している。

Now that he had an opportunity of observing her, Arthur found that her

diminutive figure, small features, and slight spare dress, gave her the appearance of being much younger than she was. A woman, probably of not less than two-and-twenty, she might have been passed in the street for little more than half that age. Not that her face was very youthful, for in truth there was more consideration and care in it than naturally belonged to her utmost years; but she was so little and light so noiseless and shy, and appeared so conscious of being out of place among the three hard elders, that she had all the manner and much of the appearance of a subdued child.

アーサーはその姿を見る機会に恵まれたいま気がついたことだが、身体も小さく、顔の造作も小さく、寸づまりの服を着ているために、実際よりもずっと年が下に見えたのだ。おそらく **22** 歳にはなっているだろうが、街頭ですれ違えばその半分の年齢に見られるかもしれない。顔が若々しいから、というわけではない。なにしろ実際 **22** 歳の女に当然身につく以上の思いやりと気苦労がその顔に現れていたからだ。ところが、なりが小さく軽く、音もたてずにおずおずと歩き、三人の年長者の間にまじっていかにも場違いであることに自分でも気づいていたので、おとなしい子供のような様子で立居振舞になっていたのである。

エイミーの体が小さく、おとなしい子供のような様子で立居振舞は、**22** 歳でありながら 'little' という形容詞で表現されるエイミー (**Little Dorrit**) をよく説明している。

ところで、ディケンズが第1巻第9章のタイトルを '**Little Mother**' としていること、まさにこの点に注目したい。この章のタイトル '**Little Mother**' の意味は、アーサーとエイミーが監獄の建っている大通りに出た時、マギー (**Maggy**) が「小さな母さん！小さな母さん！」 (**100**) と呼ぶことから明らかとなる。ディケンズは、アーサーの目に映ったマギーについてこのように説明している。マギーは **28** 歳くらいで骨太で、顔の造作が大きく、手も足も大きく、大きな目をした禿頭の女性である。エイミーは、マギーについて、彼女が **10** 歳の時にひどい熱病にかかってそれ以上成長が止まってしまった、と説明する。ディケンズは、年齢的には明らかにエイミーよりも年上であるマギーに「小さなお母さん」と呼ばせることにより、エイミーの保護者的側面を強調しているわけだ。さらに言うならば、章のタイトル '**Little Mother**' により、ディケンズはマギーだけでなく父親に対しても彼の母親のような役割を果たしているエイミーを示していると考えられる。ディケンズは、「父に恥ずべき点があるとか、わたしが父のことで何か恥じていると申すのではございません。ただ、父を理解してやらねばならぬ、ということです。」「父の態度は本当の紳士の態度で、見習うに値するとよく言われます。」「善良で忍耐強くて正直な方がたが、不運のためにあそこ (マーシャルシー監獄) に入ってしまった例を、わたしはたくさん知っております。」 (**97**) というエイミーの言葉により、父親に対する保護者的存在としてのエイミーを印象づけている。

この章の最後にアーサーがエイミーに別れを告げる時、彼の目に映ったエイミーの様子をディケンズは次のように描写している。

The court-yard received them at last, and there he said good-bye to Little Dorrit. Little as she had always looked, she looked less than ever when he saw her going into the Marshalsea lodge passage, the little mother attended by her big child. The cage door opened, and when the small bird, reared in captivity, had tamely fluttered in, he saw it shut again; and then he came away. (103)

とうとう二人が門前の路地に着くと、アーサーはリトル・ドリットにさよならを言った。彼女はいつも小さかったけれども、マーシャルシー監獄の門番小屋の入口に入っていく姿を見ていると、いつもより一層小さく見えた。大きな子供を連れてきた小さな母さんだった。籠の戸が開き、その中で生まれ育った小鳥がおとなしく入って行き、また戸が閉まるのを見てから、彼は立ち去った。

引用の「大きな子供を連れてきた小さなお母さん」という箇所は、エイミーのマギーに対する保護者的側面だけではなく、あたかも彼女の父親に対する保護者的側面をも暗示しているかのようである。

The Old Curiosity Shop のネルが祖父に対して保護者的存在であったように、*Little Dorrit* のエイミーは、父親に対して保護者的存在である。ただネルとエイミーの相違点は、ネルが祖父とともにグロテスクな金貸しクウィルプ(Quilp)の脅威と苦難から逃避する一方で、エイミーが現実や周囲の状況と闘う点である。また、ネルが自分の運命をロンドンの家の棚の上にあった木版画づきの古い本、すなわち、ジョン・バニヤン(John Bunyan, 1628-88)の *The Pilgrim's Progress* (1678) に出てくる主人公クリスチャン(Christian)の運命になぞらえ、死(天国)への旅を続ける一方、エイミーが苦勞の多いマーシャルシー監獄の子供としての現実から逃れようとせず、それを受け入れ実質上落ちぶれた一家の支えとなっている点で異なっている。

エイミーは通いのお針子で、8時から8時まで雇われていて、時間きっかりに現れ、時間きっかりに消えていく。エイミーの8時と8時の間の他の半日は、アーサーにとって完全に謎であったが、エイミーがクレナム家に入出入りすることから彼は自身の知らないエイミーの世界へ導かれる。アーサーは、エイミーから彼女の父親をマーシャルシー監獄に閉じ込められるのに関係のある人物、すなわち、タイト・バーナクル(Tite Barnacle)の名前を聞き出し、ドリット家の窮状を救うべく混沌とした事情の調査に乗り出すが、彼の「私は知りたいんです」という言葉を裏切るかのごとく迂遠省(Circumlocution Office)は彼を煙に巻き、省の方針「仕事やるべからず」を貫く。¹⁰

エドガー・ジョンソン(Edgar Johnson)は、「迂遠省が罪の判決を下し、壁の向こう側へ

追いやった**20**年以上がウィリアム・ドリットにとって消すことのできない傷となっていて、解放された時でさえ、心の傷あとを消すことは永久に不可能なことである」、と指摘しているが、¹¹このことは、第2巻第**19**章の「空中楼阁の崩壊」を見れば明らかである。長年、マーシャルシー監獄で過ごしたウィリアム・ドリットは、かつての紳士意識から空しく費やされた**25**年間を取り戻すべく階級の上昇をめざし、上流社交界に出入りするが、**25**年間の獄中生活によって受けた精神的圧迫や強迫観念から完全に自由になることができず、マーシャルシーの囚人であったときの心理状態に逆戻りしてしまう。ウィリアム・ドリットは、いわば、監獄だけでなく階級システムの囚人と言っていい人物であるだろう。

一方、マードルの事業に投資していたアーサーは、マードルが偽造着服により自殺をした結果、破産してしまい、監獄の囚人となる。

そのマードルはヴィクトリア朝時代の詐欺的資本家や貪欲な投資家を反映した人物である。彼の状況は、リチャード・バリックマン(**Richard Barickman**)の指摘しているように、「社会全体の象徴」である。¹²「鉄道王」ジョージ・ハドソン(**George Hudson, 1800-71**)は、**1849**年失脚した。**1840**年代、英国鉄道への投機は非常に盛んであった。ジョージ・ハドソンは、次々と鉄道会社を合併し、「鉄道王」として有名になったが、公金着服により失脚する。ジョン・サドリア(**John Sadleir, 1814-56**)も自身が経営していた銀行(**Irish Bank**)の公金着服が暴露されようとした時自殺した。ブライアン・マレー(**Brian Murray**)は、マードルがジョン・サドリアの一側面を反映していると指摘する。¹³小説においてマードルは、巨万の富を持ち、巨大な企業家として描かれている。ディケンズは、マードルの勢力を表すため、マードルを、「新約聖書を書き変えずで天国へ入ってしまった金持ち」(**614**)と表現する。マードルは巨万の富を持ち、途轍もない巨大な企業家であるが、ディケンズのこの表現は、新約聖書でイエス・キリストが弟子達に言う言葉、すなわち、「富んでいるものが天国にはいるのは、むずかしいものである。」、「富んでいるものが神の国にはいるよりは。らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」(**Matthew 19 : 23-24**)と言う部分を書き変えることができそうなほどマードルの勢力が盛んであることを示している一方、いかにマードルが傲慢であるかを示していて、アイロニーを含んだ表現と言えよう。

このような傲慢なマードルの事業に投資していたアーサーは、マードルが自殺したため破産し、マーシャルシー監獄に投獄されるが、彼は、マーシャルシー監獄の囚人のみならず、投資や金儲けに走る人々の影響を受けた犠牲者と言ってもいい。さらにアーサーは、人間を監禁状態に追いやるようなカルヴィン主義の犠牲者の一人であり、クレナム夫人の誤った信仰の囚人となっている。このようなアーサーを救い出すのが、かつてマーシャルシー監獄にいたエイミーであるが、エイミーによる救済の前にクレナム夫人とキリスト教にアーサーがどのような影響を受けるかを次に述べておきたい。

4.クレナム夫人とキリスト教

アーサーは最終的にエイミーとの結婚により幸福を得るが、そこへ至る過程において、クレナム夫人の独特なキリスト教観が大きな障害となる。クレナム夫人と彼女の説くキリスト教精神がアーサーの心の中で大きなウェートを占め、彼の行動を決定づける要因を持つからである。

アーサー・クレナムは父親の商売を手伝って 20 年以上中国に住んでいたが、父親が死に、帰国する。彼を迎えたのは、ロンドンの憂鬱であった。教会の鐘は、アーサーの子供の頃の悲惨な日曜日の記憶を呼び覚ます。彼は日曜日、母親に三度も礼拝堂へ連れていかれる。厳格な母親と厳格な教会の規律は、彼を精神的に縛るものであった。第 1 巻第 3 章の冒頭は、ディケンズの厳格な安息日遵守主義協会への反発を表している。アーサーにとって、日曜日とは、少年の頃の忍耐と腹立ちと陰気さに他ならない。

このような日曜日の厳格さは、18 世紀後半と 19 世紀初期の宗教的リヴァイバルの顕著な結果であった。日曜日遵守協会の圧力のもとで行政機関や行政官は厳しい法律や慣例を作り、施行した。彼らは、厳しい法律や慣例が無慈悲な長老派の規則を特徴づける抑圧と厳しさと匹敵することを求めた¹⁴。安息日を守ることは、多くの人にとって、不快であり、不満であり、そして憂鬱であった¹⁵。

ディケンズは、アーサーについて「新約聖書の恵み深い話のことなど理解していなかった」(30)と書いているが、この「恵み深い話」とは、イエスがどろを作って、盲人の目を開けたのが安息日であった(**it was the sabbath day when Jesus made the clay and opened his eyes.**)(John 9:14)ことを思い起させる。ディケンズは、イエスの愛と比較し、クレナム夫人がむやみに厳しいだけの意味のない教育を行っていたことを印象づけている。ディケンズは、クレナム夫人が求めていた宗教を次のように説明する。

Great need had the rigid woman of her mystical religion, veiled in gloom and darkness, with lightnings of cursing, vengeance, and destination, flashing through the sable clouds. Forgive as our prayer too poor in spirit for her. Smite thou my debtors, Lord, wither them, crush them; do Thou as I would do, and Thou shalt have my worship: this was the impious tower of stone she built up to scale Heaven.
(47)

この酷薄無情な女が求めていた神秘の宗教とは、暗黒と陰鬱のヴェールにくるまり、呪いと報復と破壊の稲妻が暗雲を貫き通すようなものだった。我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、主よ、我らの罪をも赦したまえ、などというのは、彼女にとってあまりにも心の貧しい祈りであった。主よ、我に罪を犯す者を叩きつぶしたまえ。滅ぼしたまえ、粉碎したまえ。我がなすごとく主よなしたまえ。さらば我は主を崇めまつ

る。これが彼女が天国に到達すべく建てた不遜な石の塔であった。

このような曲解したキリスト教解釈は、彼女の過去から生まれたものである。クレナム夫人は、第2巻第30章でリゴー(Rigaud)に自身の過去を打ち明け始める。彼女もまた子供時代から自身がアーサーに行った教育と同じような教育を受けている。彼女の若いころは、派手なことや楽しみは罪深いことだと禁じられた。そして、人間の心の腐敗、人間生活の悪、人間の頭上に待ち受ける悪、人間を取り囲む恐怖などを毎日教えこまれる。クレナム夫人は、彼女自身と同じように厳格に育てられた夫と結婚するが、この夫は、彼女の期待を裏切り、独身時代、神に逆らう罪を犯し、自身の代わりに罪深い女を抱いていたのだ。それ以来、彼女の心には「忘れてはならない」(775)という言葉が刻みこまれる。彼女はアーサーの母親ではなかった。クレナム夫人は、「復讐計画」(773)を持ち続け、アーサーを自身の復讐の犠牲者とする。彼女は、自身を「神のしもべ、神の代理人にすぎないのだ」(775)と考え、自身の復讐を正当化する。

さらに、ディケンズは、クレナム夫人の傲慢さを次のように表現している。

More than forty years had passed over the grey head of this determined woman, since the time she recalled. More than forty years of strife and struggle with the whisper that, by whatever name she called her vindictive pride and rage, nothing through all eternity could change their nature. Yet, gone those more than forty years, and come this Nemesis now looking her in the face, she still abided by her old impiety—still reversed the order her Creation, and breathed her own breath into a clay image of her Creator. Verily, verily, travelers have seen many monstrous idols in many countries; but no human eyes have ever seen more daring, gross, and shocking images of Divine nature, than we creatures of the dust make in our own likenesses, of our own bad passions. (775)

いまこの白髪頭の女が思い出している時代から、もはや40年以上が経っていた。40年以上もの間、お前は自分の復讐心と自尊心にどんな名を与えようとも、その本質は永遠の目から見れば全然変わりようがないのだぞ、という彼女の内心のささやきと戦い、格闘してきたのだ。しかしながら、この40年以上の年月が経ち、いまやこの報復が彼女をにらみつけているにもかかわらず、彼女はいまだに昔の傲慢不遜をすてきれない、いまだに創造の順序をひっくり返して、造物主たる神の形をした粘土人形に自分の息を吹き込んでいるのだ。まことに、まことにこれまで海外旅行者はいろいろな異教徒の国で多くの恐ろしい偶像を眺めたことがある。しかし、土くれから造られたはずのわれわれ人間が、自分の邪悪な激情から自分の姿に似た人形を造り、これに神のみ心が宿っていると僭越に信じているほどの不遜で恐ろしい偶像崇拜を、これま

で見た人がいるだろうか。

この箇所、ディケンズは『旧約聖書』の「創世記」に言及し、不遜なクレナム夫人を批判している。すなわち、ディケンズは邪悪な復讐心を持つクレナム夫人を批判するため、「創世記」における「主は土くれで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きたものとなった。」(Genesis 2 : 7)という部分をパロディにして引用しつつクレナム夫人を批判している。第2部第31章で、「善とではなく、悪と戦ってきたのです。罪を厳しく罰する神の手先となってきたのです。」(792)と言うクレナム夫人は、自身の被害者意識と復讐心からつき動かされたとはいえ、正当化の余地があると考えている。しかし、後でクレナム夫人が『旧約聖書』の「創世記」第18章第23節にある言葉を引用することにより、彼女のキリスト教解釈が聖書をねじ曲げた誤った解釈であることが明らかとなる。なぜならば、千人の罪人の中に一人の正しい人間がいるときには、正しい者も罪人もともに滅ぼす昔の時代だったら、自分の行為は神により正当化されるはずだという彼女の解釈は、聖書の原典とは異なっていて、自分勝手に作り上げた解釈であるからだ。聖書において、ソドムの住人の罪の行いに怒り、神は町中の人間を滅ぼそうとするが、アブラハムが言う「正しい者と悪いものを一緒に殺すようなことを、あなたは決してなさらないでしょう」(Genesis 18 : 25)という言葉は、神の愛と寛容の精神を信じての言葉である。結果として、アブラハムの甥であるロトと彼の家族は、神により救い出される。このことから、クレナム夫人が自身の復讐心を正当化するため、聖書を自分の都合のいいように引用していることが明白となる。

「子供が束縛と苦難により罪から解放されること」(791)、これが、彼女の望んだことであったはずだが、彼女のアーサーに与える束縛と苦難は、彼女自身もアーサーも自由にならない。ディケンズは、アーサーがいかに監禁状態を経た後、自由になるかを描いている。心理的側面として、アーサーがマードルの事業に投資するため会社の金を使ったので、共同経営者のダニエル・ドイス(Daniel Doyce)が彼を責めたりしなくとも、罪を感じるがゆえにみずから監禁状態を求めるということが当然考えられる。しかし、作品においてもっと重要なことは、アーサーがエイミーの愛を確認するため、マーシャルシー監獄に入ることである。確かにアーサーの監禁生活は、いわば、社会と誤った宗教によってもたらされたものであるが、ディケンズは、作品において現実の監禁状態と心理上の監禁状態を重ね合わせ、「社会における囚人」であり、「心理上の囚人」であるアーサーがいかに解放されるかを我々に示している。以下、アーサーの監禁状態からの解放について述べたい。

5.アーサーの「監禁状態」からの解放が持つ象徴的意味

第2巻第29章に、破産し、マーシャルシー監獄に入っているアーサーをエイミーが訪ねる場面がある。アーサーは、エイミーのことを「やさしくて、忠実で、金の力に毒されて

いない」、「声音も、目の輝きも、やさしい手も、まさに真実と安らぎの天使そのもの」(756)とを感じるが、エイミーがアーサーに自分の財産を全て提供することを申し出た時、アーサーは、「そのような代価を払って自由と希望を手に入れたとしても、その重みにぼくは耐えられないでしょう」(760)と言い、彼女の申し出を断る。このような彼は、心理的に重荷を感じてはいるが、注目に値することは、エイミーがアーサーを救い出し、彼の過去の辛い思い出を洗い流す役割を果たしていることだ。

第2部第34章で、エイミーは監獄の中の囚人アーサーに本を読んで聞かせるが、アーサーは、エイミーの声から次のような印象を受けている。

Changeless and barren, looking ignorantly at all the seasons with its fixed, pinched face of poverty and care, the prison had not a touch of any of these beauties on it. Blossom what would, its bricks and bars bore uniformly the same dead crop. Yet Clennam, listening to the voice as it read to him, heard in it all that great Nature was doing, heard in it all the soothing songs she sings to man. At no Mother's knee but hers, had he ever dwelt in his youth on hopeful promises, on playful fancies, on the harvests of tenderness and humility that lie hidden in the early-fostered seeds of the imagination; in the oaks of retreat from blighting winds, that have the germs of their strong roots in nursery acorns. But, in the tones of the voice that read to him, there were memories of an old feeling of such things, and echoes of every merciful and loving whisper that had ever stolen to him in his life. (815)

監獄の中は、貧困と心労でやつれはてたまま変わることのない顔で春夏秋冬の別を知ることなく眺めているのだから、このような四季の移り変わりの美しさの一つといえども目にすることなく、単調不毛のままである。かりに花が咲き匂ったとしても、ここの煉瓦と鉄格子がいつも同じ生気のない実りしか与えてくれない。しかし、本を読んで聞かせてくれる声に聴き入っているクレナムは、その声の中に大きな自然の営みを聞くことができた。彼は子供の時母親の膝に抱かれて未来の希望とか夢とか、奔放な空想とかにふけたことはなかった。自然が母親の代わりをしてくれたのだった。早くから芽を出した想像力の種の中にひそんでいた愛情と謙虚さの収穫も、子供の種の中からその力強い根を生み出し冷たい厳しい風を防いでくれる巨大なかしの木も、すべて自然が与えてくれた賜物だった。しかし、彼に本を読んでくれている声音の中には、こういった昔の感情を思い出させてくれる何かがあった。これまでの一生を通じてそっと忍び寄ってくれた慈愛と同情のささやきを思い起こさせてくれる何かがあった。

アーサーは、エイミーが本を読んでいる声から自身の自然な感情を取り戻す。というのもエイミーはクレナム夫人の与えることのなかった母性愛をアーサーに注いでいるからだ。さらに一歩進めるならば、エイミーは、彼が”**Good angel!**”(816)と言うように、神聖な印象を与える女性でもあるからだ。

ディケンズは、アーサーに意志力の欠如をもたらし、¹⁶クレナム夫人を麻痺状態にするカルヴィニズムという文化的イデオロギーから、人間がいかにかに解放され自由を得ることができるか、を示している。クレナム夫人は、表面上は道徳心から意識下では復讐心からアーサーを育て上げるが、彼女のカルヴィニズムは自身の復讐心の正当化のためであり、周囲の人間を不幸にするものである。アーサーの大叔父であるギルバート・クレナム(**Gibert Clennam**)は、かつてアーサーの父親と彼が愛していた娘との仲を引き裂いたことを後悔し、フレデリック・ドリット(**Frederick Dorrit**)が 50 歳になったとき、もしいれば彼の末娘、もし娘がいなければ彼の兄弟の娘が成人の際に 1000 ギニーの贈与、という遺言補足書を残すが、彼女はそれを握りつぶす。後に悪党のリゴー(**Rigaud**)がそれを嗅ぎつけ彼女を恐喝するが、リゴーはクレナム夫人の家が崩壊した時下敷きになって死ぬ。雷鳴のような轟音とともに崩れ落ちる屋敷は、悪党に対しての懲罰の意味を持つだけでなく、クレナム夫人の誤った宗教観の崩壊とも読める。クレナム夫人は、屋敷の崩壊を目の当たりにすると、表通りで石の上に崩れるようにしゃがみこみ、その時以来指一本動かさず、一言も口がきけなくなってしまう。その後3年ばかり彼女は車椅子によりかかり、周囲の人々をじっと見つめ、その言葉を理解しているように見えたが、これまでかたくなに守ってきた沈黙を永遠に強いられることになった。目を動かしたり、頭の動きでイエス、ノーを表現することができるだけで、いわば石像のような生きる屍となり、やがて死んでいった。

ここでクレナム家崩壊の前にエイミーがクレナム夫人に言う言葉に注目する必要がある。エイミーが言う言葉、「私達の道徳的・性格的弱さに涙して下さる忍耐強い主によってのみ導かれますように」(792)は、明らかに作品世界において、イエス・キリストによる「罪の赦し」が大きなテーマになっていることを示している。さらに、クレナム家崩壊の直前の自然描写がイエス・キリストによる「救済」を強調している。すなわち、光の矢が大空を上下左右に伸びている様が、「いばらの冠を栄光に変えた平和と希望の新しい祝福の約束の象徴」(793)の様になっているのである。このような描写により、ディケンズは、人間が復讐心から解放されるには、イエス・キリストによる「罪の赦し」以外にはありえないことを示している。

アーサーのマーシャルシー監獄からの解放は、*Little Dorrit*において象徴的意味を持っている。その象徴的意味とは、人間が己の力ではなく、神の救いのわざによって救われるという意味である。*Little Dorrit*ではとりわけ新約聖書的救済が印象づけられる。

新約聖書に、監禁状態から自由になる人物の話がある。使徒言行録の第 12 章は、ヘロデ王¹⁷によるヤコブの殺害とペトロ¹⁸の投獄について書かれている。この当時、キリスト教は、ユダヤ教から見れば異端であった。ヘロデ王は、ユダヤ人達をうまくおさめるため教

会を迫害した。彼は、キリスト教の指導者を処分すれば、ユダヤ人達に喜ばれると思ったのである。最初の犠牲者は、初代教会において重要人物であったヤコブであった。ヤコブはヘロデ王につるぎで切り殺される。ペトロもまた投獄される。使徒言行録第 12 章第 6 節以降には、ペトロの状態が細かく記されている。ペトロは、二重の鎖につながれ、二人の兵卒の間に置かれて眠っている。番兵達は、戸口で獄を見張っている。すると、突然主の御使いがそばに立ち、光が獄内を照らす。そして、御使いが「帯をしめ、くつをはきなさい」と言ったので、彼はそのとおりにする。それから、「上着を着てついてきなさい」と言われたので、ペトロはついて出て行く。幻を見ているように思ったペトロであったが、二つの衛所を通り過ぎて、町に抜ける鉄門のところへ来ると、ひとりで鉄門が開き、一つの通路に出る。御使いが離れ去った時、ペトロはわれにかえり、主が御使いをつかわして自分を救い出してくれたことに気づく。使徒言行録のこの話は、神がイエス・キリストの福音を伝えるためペトロを厳重な牢から救い出したことを印象づける話である。またこの話は、堅固な牢に入れられ、二本の鎖でつながれ番兵達に見張られていれば、脱出は人間には不可能なことであるが、人間の力をはるかに超えている神の救いのわざのみが、脱出を可能にすることを示している。

Little Dorrit において、エイミーの役割はペトロを救い出す御使いのような役割と言ってよかろう。第 2 部第 34 章で、エイミーが語る言葉、「神さまの思召しならば、わたしはあなたと一緒にここ（マーシャルシー監獄）へ戻ってきて、わたしの愛と真実で慰め尽くすのがわたしの幸せなのよ」(817)がそのことを示している。エイミーによる救済は、神のわざを感じさせる点では、聖書と同じ意味を持つ救済であるが、現実的な救済である点で聖書の使徒言行録とは異なる。しかし、その救済は、クレナム夫人によってもたらされたカルヴィニズムという文化的イデオロギーという心理的監獄からアーサーを救い出す意味があるのだ。

カルヴィニズムの中心思想をなすものは、聖書の純粋な理解に帰ろうとする、いわゆる、福音主義であるが、その著しい特徴として三位一体の神の絶対主権があげられる。したがって、神の自由とか尊厳とか支配とかの超越的側面を強調し、その結果、その敬虔はあくまで神中心主義であって、幸福主義的、功利主義的態度を排し、ここから旧約聖書の尊重が生まれた。しかし、*Little Dorrit* のクレナム夫人の信奉するカルヴィニズムはあまりに厳格であるため、人間から幸福を取り上げてしまう危険性を持っている。エイミーの救済は、このようなカルヴィニズムによって形作られた心の中の監禁状態からアーサーを解き放つ救済であり、ディケンズは、最後にステンドグラスのイエス像越しに射し込んで来る日光を浴びながら結婚する二人を描写することにより、イエス・キリストによる救済を我々に印象づけていると思われる。

結論

ディケンズは、*Little Dorrit*において自身の子供時代の体験を効果的に用いている。父親のジョンが借財不払いによってマーシャルシー債務者監獄に入れられ、チャールズ以外全員監獄に入り（家族も希望すれば一緒に入れることになっていた）、チャールズだけが外に粗末な部屋を借りて通わなければならなかった体験は、そのまま *Little Dorrit* に移行した観がある。すなわち、生活能力のない作家の父親ジョンが他の囚人から生活費の援助を受けるほどおちぶれた作品中のウィリアムに、また靴墨工場で働かなければならなかったディケンズが父親や家族のために働かなければならない針女エイミーに姿を変えたと考えられる。マーシャルシー監獄の子供エイミーが、「マーシャルシー監獄の父」と呼ばれるほど墮落したウィリアム・ドリットが自分にとっての父親になれるわけではないと察知し、一家の苦勞と屈辱を心の中で耐え、自身が逆にウィリアムにとっての母親のような存在になることを自身の役割と認識し、彼女自身の「監禁状態」を心理的に克服する様子は、そうするより現実に対処する方法がなかったディケンズの子供時代の様子を示していると考えられよう。

ディケンズは、自身の子供時代の体験から同時代の大人の犠牲となった子供に深い共感と憐れみを感じ、大人の犠牲者たる子供像を多く生み出したが、*Little Dorrit* のエイミーは、初期の作品 *The Old Curiosity Shop* のネルとは、異なる側面を持っている。すなわち、ネルが現実から逃避し、天国に至る旅を続ける一方、エイミーが現実と闘い、結婚に至る点で両者は異なるのだ。さらに、エイミーはアーサーの人生に決定的影響を及ぼし、彼を心の中の「監禁状態」から救い出す点で、ネルよりさらに発展した人物である。エイミーの役割は、クレナム夫人によってもたらされたカルヴィニズムという文化的イデオロギーの監獄からアーサーを救い出す精神面での救済である。*Little Dorrit* においてディケンズは、人間の自由を奪い、精神を「監禁状態」に追いやるクレナム夫人のキリスト教の行きつく先を示し、復讐心から解放されるためにキリスト教を自分の都合のいいように解釈し他者に懲罰をもたらしてはならないこと、復讐心から解放されたいならイエス・キリストの行った罪の赦しを自ら実践する以外にないこと、を示していると言っているだろう。

注

- 1 Angus Wilson, *The World of Charles Dickens*, 59.
- 2 デイヴィッドは、マードストーン＝グリーンビー商会で働く少年達をかつての旧友と比べ、そういった少年達の中で働くことに関し次のように屈辱を感じている。

No words can express the secret agony of my soul as I sunk into this companionship; compared these henceforth everyday associates with those of my happier childhood—not to say with Steerforth, Traddles, and the rest of the boys; and felt my hopes of growing up to be a learned and distinguished man crushed in my bosom. The deep remembrance of the sense I had, of being utterly without hope now; of the shame I felt in my position; of the misery it was to my young heart to believe that day by day what I had learned, and thought, and delighted in, and raised my fancy and my emulation up by, would pass away from me, little by little, never to be brought back any more; cannot be written. As often as Mick Walker went away in the course of that forenoon, I mingled my tears with the water in which I was washing the bottles; and sobbed as if there were a flaw in my own breast, and it were in danger of bursting. [Charles Dickens, *David Copperfield*, 155.]

3 Paul Davis, *Charles Dickens A to Z*, 215.

4 Philip Hobsbaum, *A Reader's Guide to Charles Dickens*, 197.

5 Frank Donovan, *Dickens and Youth*, 103.

6 Charles Dickens, *The Old Curiosity Shop*, 533-39.

7 日本語訳の部分は、北川悌二訳『骨董屋』（筑摩書房）を参考にしたが、一部修正を施してある。

8 Christopher Herbert, *Filthy Lucre: Victorian Ideas of Money, in Victorian Studies* Vol.44. No.2., 197.

9 Charles Dickens, *Little Dorrit*, 65. 以下、引用文は、同書により引用末尾の() にページを示す。日本語訳の部分は、小池滋訳『リトル・ドリット』（筑摩書房）を参考にしたが、一部修正を施してある。

10 ポール・デイヴィス(Paul Davis)は、小説が 1850 年代の時事的なできごとと言及していると指摘している。デイヴィスは具体例として、迂遠省が、クリミア戦争時の行政機関の無能力ぶりと公務員を募集する方法を批判した 1853 年の議会の調査によって暴露された悪弊への攻撃である点を挙げている。(*Charles Dickens A to Z*, 215.) 作品には、ディケンズの痛烈な諷刺が見られる。ディケンズの諷刺の背景には、行政機関の不合理的、無能力、様々な部門の内輪もめが、クリミア戦争の間一連の致命的な災いを引き起こしたという事実があった。軍隊には食糧も衣類も不足していて、軍需品は軍隊に届かなかった。そして、負傷者への治療は、不十分で非衛生的であった。行政的な誤りにより引き起こされた不必要な痛みや死が、戦地から電報により報告され、イギリスの出版物に日々記録された。ディケンズは、行政機関の改革、不必要な部門、事務処理、官僚的形式主義をとり除き、家族の縁故よりも能力に基づいて官僚を選ぶべきだと考えていた。

(Paul Davis, *Dickens Companion*, 268.)

ディケンズは、縁故に基づく人事を次のように諷刺している。

The Barnacle family had for some time helped to administer the Circumlocution Office. The Tite Barnacle Branch, indeed, considered themselves in a general way as having vested rights in that direction, and took it ill if any other family had much to say to it. The Barnacles were a very high family, and a very large family. They were dispersed all over the public offices, and held all sorts of public places. (107)

- 11 Edgar Johnson, *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph* Vo.2., 884.
- 12 Richard Barickman, "The Spiritual Journey of Amy Dorrit and Arthur Clennam: A Way Wherein There is no Ecstasy", in *Dickens Studies Annual*, 7. ed. Robert B. Partlow, Jr., 165.
- 13 Brian Murray, *Charles Dickens*, 167.
- 14 R.J.Cruikshank, *Charles Dickens and Early Victorian England*, 190-91.
- 15 特に貧乏人は、安息日遵守法のもとで不平等な扱いを受けた。運搬車は、日曜日に行き来することを許されてはいなかった。1828年、ロンドンからヨークへ行く車はスタンフォードで止められた。日曜日に行く場合は、20 シリングの料金をとられた。しかし、駅馬車や貸し馬車はこの法律から免れていた。よって、金持ちなら簡単に旅をすることができたのである。また、ロンドン市長は、1839年、日曜日違法な漁をしているとして漁師たちを呼び出した。漁師たちは言い返した。紳士たちは、日曜日つりをすることが許されているのではないかと。漁師たちが生計を立てるのだと言っても説得力がなかった。市長は紳士たちを呼び出したが、彼らがもうしないと言うのを聞くと、罰することなく彼らを赦した。(Owen Chadwick, *The Victorian Church*, 144-56.)このように、安息日遵守法の適用は、金持ちの場合と貧乏人の場合で異なっていた。
- 16 作品前半で、迷った末アーサーは、ミニー・ミーグルズ(Minnie Meagles)に求愛することをあきらめる。ディケンズは、第1部第16章で決断できず、自信を失ってしまっているアーサーを次のように描写している。

Arthur Clennam was a retiring man, with a sense of many deficiencies; and he as exalted the merits of the beautiful Minnie in his mind, and depressed his own, that when he pinned himself to this point, his hopes began to fail him. He came to the final resolution, as he made himself ready for dinner, that he would not allow himself to fall in love with Pet. (195)

ポール・デイヴィスは、このようなアーサーの心理を、厳しいカルヴィン主義的な教育の結果、罪の意識を持ち、自発的感情を認識したり、自発的感情に基づいて行動することができない、と説明している。 (*Charles Dickens A to Z*, 216.)

17 ヘロデ王は、ヘロデ・アグリッパ(**Herod Agrippa**)と呼ばれるユダヤの王 (在位紀元**37-44**) である。ヘロデは、ヤコブを殺害させ、ペトロをも殺害しようとするが、ペトロは天使に救い出されることになる。ヘロデは劇的な死に方をする。彼は、神と賛えられるが、ユダヤの神に打たれて生きてまゝ蛆に食われてしまう。[ピーター・カルヴォコレッシ(著)、佐柳文男 (訳)、『聖書人名辞典』、**15-6.**]

18 ペトロ(**Peter**)は、かつてガラリア湖の漁師であったが、イエスの弟子となった。**12** 使徒の中で首席の位置にあった。ペトロは、イエスに対する絶対の忠誠を誓った直後に、こわくなって3度もイエスを知らないと言い張るが、イエスの復活の後、重要人物となる。彼は、エルサレムのキリスト教共同体で指導的立場となり、奇跡を行い、ユダヤ地方およびシリア地方を旅して伝道した。 (*Ibid.*, 116-17)

Works Cited

Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1990.

Barickman, Richard, "The Spiritual Journey of Amy Dorrit and Arthur Clennam: A Way Wherein There is no Ecstasy", in *Dickens Studies Annual*, 7. ed. Robert B. Partlow, Jr. Southern Illinois UP, 1978.

Chadwick, Owen. *The Victorian Church*. London: SCM Press Ltd., 1971.

Cruikshank, R.J. *Charles Dickens and Early Victorian England*. London: Sir Isaac Pitman and Sons, Ltd., 1949.

Davis, Paul. *Charles Dickens A to Z*. New York: Chesmark Books, 1998.

———. *Dickens Companion*. Harmondsworth: Penguin Books, 1998.

Dickens, Charles. *David Copperfield*. New York: Oxford UP, 1989.

———. *Little Dorrit*. New York: Oxford UP, 1991.

———. *The Old Curiosity Shop*. New York: Oxford UP, 1991.

Donovan, Frank. *Dickens and Youth*. New York: Dodd, Mead & Company, 1968.

Herbert, Christopher. *Filthy Lucre Victorian Ideas of Money*, in *Victorian Studies*. Vol.44. No.2. Bloomington: Indiana UP, 2002.

Hobsbaum, Philip. *A Reader's Guide to Charles Dickens*. London: Thames and Hudson Ltd., 1972.

Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph* Vol.2. Boston: Little,

Brown and Company, 1952.

Murray, Murray. *Charles Dickens*. New York: The Continuum Publishing Company, 1994.

Schlicke, Paul, “*Oliver Twist*”, in *Oxford Reader’s Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford: Oxford UP, 1999.

Wilson, Angus, *The World of Charles Dickens*. London: Martin Secker & Warburg, 1970.

カルヴォコレッシ、ピーター、『聖書辞典』、佐柳文男（訳）、教文館、1998.

ディケンズ、チャールズ、『骨董屋』、北川悌二（訳）、筑摩書房、1989.

ディケンズ、チャールズ、『リトル・ドリット』、小池滋（訳）、筑摩書房、1991.

Freedom from Imprisonment
and the Vision of Relief by Jesus Christ
in *Little Dorrit*

YOSHIDA, Kazuho

In 1857, Charles Dickens(1812-70) revisited the Marshalsea prison to look back upon the past and make a necessary atmosphere in *Little Dorrit* (1857). The Marshalsea prison was the place which Dickens could not forget in his lifetime. Dickens returned to his father's experience of debt again while he was drawing the portrait of the Father of the Marshalsea, William Dorrit, as 'a very amiable and very helpless middle-aged gentleman.' John Dickens, Charles's father, was a cheerful person but he had no sense of economy. He was imprisoned in the Marshalsea prison, and Charles had to work at Warren's Blacking warehouse, which gave him an agony and despair.

Dickens seems to change the relationship between his father and him into the relationship between William Dorrit and Amy in *Little Dorrit*. William Dorrit who is called 'the Father of the Marshalsea prison', is proud of the title although he is a prisoner for debt. Amy as a 'Little mother' of his father and the chief support of the family, shows consideration for her father; she is a protector of her father and his respectability.

Indelibly marked by the more than twenty years to which the Circumlocution Office has condemned William Dorrit behind those walls, it is forever impossible for him, even when he is released, to lose those psychological scars. In Book 2, Chapter 19, 'The Storming of the Castle in the Air', William returns to the identity in the Marshalsea prison. William Dorrit who lived for many years, is a victim of social system. Arthur who becomes a prisoner of the Marshalsea prison in Book 2, Chapter 27, is also a victim of social system. Arthur who has invested in the business of Merdle, goes bankrupt after he killed himself. Arthur is a victim of Calvinism which drives people to the condition of confinement, and is a prisoner of the wicked religion of Mrs. Clennam. Dickens showed how Arthur could be released from the cultural ideology of Calvinism which made him an indecisive man and how he could get freedom. In Book 2, Chapter 29, Amy visits Arthur who went bankrupt and became the prison of the Marshalsea prison. Amy gives him motherly love. What has to be noticed is that Amy says to Mrs. Clennam, 'Be guided only by the healer afflicted and forlorn, the patient Master who shed tears of compassion for our infirmities', before the house of Mrs. Clennam collapses.

The words of Amy show the forgiveness of sin as a theme of *Little Dorrit*. Moreover, the representation of nature emphasizes the relief by Jesus Christ just before the house of Mrs. Clennam collapses: "From a radiant centre over the whole length and breadth of the tranquil firmament, great shoots of light streamed among the early stars, like signs of the blessed later covenant of peace and hope that changed the crown of thorns into glory." Amy delivers Arthur from the ideology of Calvinism which Mrs. Clennam brought him. In *Little Dorrit*, Dickens attacked the Christianity of Mrs. Clennam which deprived Arthur of his liberty and imprisoned his mind. Mrs. Clennam adopts Arthur, the love child of Mrs. Clennam and his love, to raise him in righteousness and retribution, but her Christianity which justifies her scheme of retribution does not bring her and Arthur happiness. Dickens demonstrated that people could be released from vengeful feelings by a practice of forgiveness of sin as Jesus Christ had done, through showing how Arthur could be released from the influence of the vengeful thoughts of Mrs. Clennam with the help of Amy.